

新たな世界を拓く デザインのパワーを学ぶ

当協会の慶應義塾大学寄付講座「クリエイティブ産業研究 I」公開講座より

当協会では2009年度、慶應義塾大学(前・後期)と立教大学(後期)において、寄付講座を開講している。次代を担う学生のコンテンツビジネスに対する理解を深め、あわせて知的財産を尊重する意識を高めることがその目的である。6月25日、慶應義塾大学の寄付講座では、平野拓夫氏、川崎和男氏、蓑豊氏という日本のデザイン界をリードする3名の重鎮をお招きし、「デザイン」の持つパワーに焦点をあてた公開講座を行った。

冒頭でコーディネーターとして本公開講座の構成にご尽力された平野氏より、日本のデザインの課題と可能性を示し、そのソリューションとしてデザイン教育・研究の充実を呼びかけるメッセージが寄せられた。引き続き蓑氏より「楽しいデザインが経済を変える」、川崎氏より「デザインが世界を変える」と題する講義がなされた。デザインを通じて産業界にイノベーションをもたらしてきた3氏のコラボレーションにより、新しいクリエイティブなデザインのイメージは、限られた時間の中で確かな言葉で構築され、聴講した学生、社会人に伝えられた。

ここに蓑氏、川崎氏の講義内容の一端をご紹介します、併せて講義を踏まえた平野氏へのインタビューを掲載する。



講義ダイジェスト



楽しいデザインが経済を変える

金沢21世紀美術館特任館長 蓑豊氏
(サザビーズ北米本社副会長、大阪市立美術館名誉館長を兼務)

金沢市生まれ。慶應義塾大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒業後、ハーバード大学大学院美術史学部博士課程修了、文学博士号取得。カナダ・モントリオール、アメリカ・インディアナポリス、シカゴの各美術館にて東洋部長を歴任。1996年大阪市立美術館長に就任。2001年より全国美術館会議会長。2004年、開館準備に尽力してきた金沢21世紀美術館初代館長に就任。2005年より金沢市助役。2007年金沢21世紀美術館特任館長、大阪市立美術館名誉館長となり、同年、サザビーズ北米本社副会長に就任。

「質の高い建築デザインが街を潤し、素晴らしい人材を豊かに育て、経済発展を促すきっかけになるのです」講義のなかで蓑氏は、自身の深い感動体験を聴衆に分かつかのように、言葉を変えながら、優れた建築デザインが人々のパワーを導くという内容のテーマを繰り返し訴えた。

蓑氏が取り上げたのは、アメリカ・インディアナ州にある小さな街「コロンバス」。インディアナポリスから車で40分ほど南下したところにある、トウモロコシ畑の広がる人口わずか4万人に満たない小さな街だ。ほかに目立つ産業は、世界的なディーゼルエンジンメーカーのカミンス社が本拠を置くくらいである。アメリカ中西部のどこにでもある街というイメージだろうか。ところがこの小さな街は、全米の有名な大都市にもないような際立った特徴を持っていた。優れたデザインによる街づくりに成功し、その美しい建築物のハーモニーを見ようと訪れる人々を全米、世界から数多く集めていたのである。この街づくりには、カミンス社社長を務めたJ. アーウィン・ミラー

氏の貢献があった。

「ミラーさんは会社を大きくしてビジネスを発展させるためには、何よりも優れた人材を集めることが大切だと確信していました。何の変哲もないコロンバスに、全米から優秀な人に来てもらうにはどうしたらいいか。ミラーさんは素晴らしいデザインの建築物がそのキーになると考えました」そして招聘されたのが、現代建築の中興の祖と目されるフィンランド出身の建築家、エリエル・サーリネンである。最初に当地で手がけたのは1942年完成のFirst Christian Church。スライドで映されたデザインの時代を超えるモダンさに驚かされた。同じくスライドに丁寧な解説を施しながら、蓑氏は、教会、図書館、消防署、小学校、高校、カミンス社社屋、銀行、郵便局、病院、市庁舎に至るまで、多くの有力な建築デザイナーの手になる建物で、街がまさに彩られていることを紹介していった。デザイン費用はカミンス社が負担し、子供が集まる教会や学校、図書館などを優先して市庁舎は後になって手をつけたことも

付け加えられる。

「人を大切に考えるに基づいて作られたこの環境に優れた人材が集い、生活する人々、学校で学ぶ子どもたちから素晴らしい人材が生まれているだろうということは、想像に難くありません。特に学校は外から様子を見られるようになっているのですが、本当に子どもたちが生き生きとしています。こういう学校で学びたかったな、この学校なら間違いないだろうとつくづく感じ、その貢献度はすごいと思いました。日本でも、

デザインを通じた学びの場の環境整備が不可欠だと痛感しています」

デザインは街を豊かにし、それ以上に人を変え、子どもたちを育てていく。日本で、金沢21世紀美術館を通じて同様の取り組みを行った蓑氏は、自身の活動を控えめに語り、最後に「デザインを社会に積極的に取り入れ、活用すれば日本経済もまた変わるだろう」と提言して、セッションを終えた。

講義ダイジェスト



デザインが世界を変える

大阪大学大学院教授 川崎和男氏
(デザインディレクター、博士(医学)/名古屋市立大学名誉教授などを兼務。
日本産業デザイン振興会グッドデザイン賞審査委員会委員)

福井県生まれ。全沢美術工芸大学産業美術学科工業デザイン専攻卒業。デザインディレクターとして、伝統工芸品からメガネやコンピュータ、ロボット、原子力エネルギー、人工臓器、先端医療、海軍戦略、宇宙空間の装置化などまで幅広く研究、教育、実務活動を行う。グッドデザイン賞総合審査委員長など行政機関での委員を歴任。毎日デザイン賞、BIO賞、国共産党産業工芸賞、ICSID特別賞、SILMOグランプリ受賞など国内外での受賞歴多数。ニューヨーク近代美術館をはじめとする海外の主要美術館への永久収蔵、永久展示も多数。2006年には金沢21世紀美術館で「artificial heart:川崎和男展」を開催。

最近まで、外務省の公務にて、日本のデザインパワーをアピールしてきた川崎氏は、当地で使ったプレゼン画面をプロジェクター2台でマトリックスに展開しつつ、講義を進めた。音楽と映像の醸すイメージの世界に引き込まれ、気がつけば息をもつかせない巧みな語りの渦に入っていく。氷の上に取り残された白熊を、危機を感じない我々人間になぞらえた話が聴く人の脳裏に刻まれたころ、まずは川崎氏の「自分のためのデザイン(一人称)」が語られた。

「僕の体にはICD(Implantable Cardioverter Defibrillator:植え込み型除細動器)が入っています。28歳で交通事故に遭って、その後埋め込む手術を受けました。手術後のレントゲンを見て機械工学的に先々ネジが緩むと予想され、ドクターに噛み付いたんですが、そんなことは無いと言われた。ところが2年後に見事に緩んでしまったのです」この自身のエピソードを手始めに、話は川崎氏が東京大学と共同で取り組む人工心臓すなわち「Total Artificial Heart」の研究開発へ展開する。川崎氏の考案した全置換型人工心臓のモデルは、モントリオール科学センターに展示されている。世界から10点だけ選ばれた「21世紀の夢」に採用されたのだ。東大との共同研究の過程で、ビスの扱い一つにも敏感な生活用品を手がけたプロのデザイナーとして克明な図面を描き、大学教授の納得を引き出した話も披露された。

「去年突然この女性がテレビに現れまして、綺麗な人だと思ったら、僕のデザインした眼鏡をかけていたんです」アメリカ共和党副大統領候補となった元アラスカ州知事ペイリン氏の写真を見せながら、「あなたのためのデザイン(二人称)」の話に移行す

る。川崎氏のデザインした眼鏡は、眼鏡の産地、福井県鯖江市に本拠を置く老舗メーカーが製造する。アメリカでは著名人の愛好家が多く、パウエル元国務長官、女優のウーピー・ゴールドバーグ氏も名を連ねる。今回の大統領選では、メディアで「国民は彼女を見ているのではなく、彼女の眼鏡を見ている」と言及され、Kawasakiデザインの眼鏡は世界でブレイクした。クリップをヒントにネジを使わず、パーツを23点に減らしたことなどが特徴に紹介される。また2メートル先に65インチディスプレイが見える将来の眼鏡の開発に成功したことも告げられた。

「今、三人称の「彼らのためのデザイン」としてPKD(Peace-Keeping Design)という運動を起こしています」国連のPKF、PKOの活動下でさえ、兵器の扱いに慣れていく当事国の子どもの現状を見せ、「政治も経済もダメ。デザインだけが世界を変える!」と力を込めて語る。活動がかたちになったものの一つに、使い切りワクチンのデザインがある。一回使うと針がたたみ込まれて使用不可となり、使用後に麻薬のために使われる危険性の大きい従来品の欠陥が解消されたユニークな構造に舌を巻いた。これ以外にも救急医療の現場で、患者を重症度、緊急性によって分別し、優先順位をつけるトリアージの改革などが紹介された。

川崎氏はさらに、地球上の人口約67億人の65%を占める約45億人が年収5万円以下の生活を送る現状を話し、これらの人たちのために何を行うかが資本主義体制の革新であると語り、デザインが未来に希望の輝きを投げけることを示唆して締めくくった。



INTERVIEW

デザインに心を込めて、 人間味のあるものづくりを

日本の工業デザインの草創期を拓いた平野拓夫氏は、日本デザイン界のまさに巨匠である。また川崎和男氏の直接の師であり、蓑豊氏のよき相談相手でもある。平野氏に今回の公開講座の意義、日本のデザイン界の課題や進むべき方向性などについてお話を伺った。

前金沢美術工芸大学 学長 平野拓夫

(株式会社平野デザイン設計名誉会長、多摩美術大学名誉教授、金沢美術工芸大学名誉教授、北陸大学学術研究顧問・客員教授などを兼務)

函館市生まれ。東京芸術大学工芸科卒業。通商産業省に奉職。1955年に日本政府選衛海外派遣留学生としてアメリカのアートセンター・カレッジ・オブ・デザインでデザインを学ぶ。帰国後、日本政府の要請により1957年、東京芸術大学、金沢美術工芸大学、女子美術大学の3校で日本で初めて本格的なデザイン教育を開始する。海外模倣品の多かった日本で、独創的な商品開発を促すべく通商産業省グッドデザイン商品選定制度を提案し、創設する。1970年には平野デザイン設計を設立し、デザイン・建築・CI、企業経営戦略としての商品開発、デザインマネジメント業務を遂行した。1992年第一回デザイン功労者表彰受賞。2007年叙勲。瑞宝中綬章を受章。

日本の工業デザイン界の草分けを担ってこられましたか、 エピソードをご紹介いただけますか。

戦後間もないころの日本は、質の高い海外の模倣品を製造・輸出していました。昔から舶来品を導んできた日本では、模倣の抵抗感は少なかったんですね。しかし質が良くて安い海外の製造側から苦情が激しくなった。さらに日本製品ボイコット運動が起きた。そこで関係省庁が国連などから話を聞き、独創的なものづくりが必要だと認識するようになります。それが「デザイン」だったんです。本当はどういうものか分からない状況で、独創的な工業デザインに携わる人の育成が急務となり、それを担う教育者の養成も急がれました。そこで当時通産省に勤務していた私がアメリカの大学に留学して学ぶことになりました。

留学時代は4年のコースを1年でやり遂げる、大変ハードなカリキュラムを受けました。辛かったですよ。週に3日間徹夜は当たり前の世界。帰国してからは東京芸術大学、金沢美術工芸大学、女子美術大学の3校で本格的なデザインを教えることになりました。

講師を務めたお二人とも

少なからぬご縁がおりだと伺っています。

川崎和男氏は金沢美大での教え子の一人です。私は世界の留学生の熱意に触れ、日本でも優れた人材を作りたいと、指導も自然に熱を帯びました。川崎氏などからは「鬼」と呼ばれたようです(笑)。彼には学生時代に課題のやり直しを8回命じたことがあります。それでも彼は、最後までついてきて、辛さを越え9回目にすばらしい作品ができました。「君は見どころがあるから完璧を求めたんだ。途中でだめだと思ったらここまで徹底しなかったよ」と言ったら、彼は大きな達成感を得て、本当にスパルタ教育に耐えてくれました。現在彼は国際的な活動としてデザインと医学を融合し、世界的に注目されています。

蓑豊氏とは、私が金沢美大の学長を務めていたのと同時期に、金沢21世紀美術館の館長として来られた縁があります。そこで公私にわたり話し合う関係ができ、一緒に海外視察にも行きました。

彼は常に「もの」や「こと」に対して視点を変えて立ち向かい画期的なアイデアを創出し、かかわる人達に感動を与え具現化する。それに信用が伴い、世界的に広いネットワークを持つ人物です。ミーティングやパーティー等で違う国の方4、5人と異なるテーマの話をしていても、それぞれに笑いながら対応し同時進行している様子は、まるで聖徳太子のようです。彼の業績は、美術館において子ども達が直接触ることができる作品を取り込むことで、感動体験を提供する場を作ったこと。それが子ども達の感性を育てる基礎を醸成させました。

日本の産業界でのデザインの位置づけ、 これからの課題についてお聞かせください。

デザインの本当の意味は、多様な関わりで問題点を見出して解析し、知的に解決し、具現化する。この一連のプロセスを指します。そうなることあらゆるクリエイティブな活動がデザインになります。

今まで日本のものづくりは縦割りで行って来ました。早く、大量生産できる。そこではデザイン要素は最後に少しアレンジされるのが常でした。間違いない製品だが、人に訴える部分が欠けてきました。独創性はあっても、人間味が薄い。残念です。これからの日本は、温かさや人間性を大切にしなければならない。ライバル国とコスト競争に陥らない、デザインで選ばれる製品が新たな活路を開きます。

造形やデザインの世界は音楽と似ています。心を込めることが人に訴えるプロダクトやプロセスを生むのです。聴く人と同じく、使う人との心の交流が不可欠です。これから求められるのは、それをできる強力なリーダーシップを持った人物の育成です。たとえば川崎氏や蓑氏のような方々ですね。それを私はデザイン戦略と呼んで、推進しています。そこでは、学際的な活動がキーになり、総合大学で学部卒業生や社会人が横断的にデザインを学ぶ仕組みが、非常によい教育体制になる。今回、本講座の担当教官である慶應義塾大学アートセンター所長・美山良夫教授との出会いに恵まれ、総合大学である慶應義塾大学で公開講座を実施できました。私たちの活動の広がりにとってもより重要なきっかけになったと思います。